

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

9

2018

特集 いっしょに漁業の成長化



いっしょに漁業の成長化

3 漁船高船齢化に漁船改革がカギを握る

平石 一夫

漁業漁船は高船齢化が進み、生産性、居住環境、安全性の悪化や経費増大など問題山積だ。業界が一丸となり取り組むべき代船の将来像を探る

7 魚活ボックスのレンタルの拓く活路

関山 正勝

活魚専用コンテナ「魚活ボックス」を物流機器レンタル企業が開発。儲かる水産業の実現には、魚活ボックスを活用し流通するライブチェーンが必要と説く

11 地の利を活かした養殖産業の競争力

松原 孝博

競争力ある養殖産業の実現へ、日本有数の養殖地域である愛媛県南予のレジデント型研究現場より最新養殖技術を紹介してもらった

情報戦略レポート

15 収益確保が最大の課題 技術習得向上進む回答も

—2018年度 認定新規就農者フォローアップ調査—

17 インタビュー 米田 茂之／山梨県

18 インタビュー 近藤 雅彰／香川県

経営紹介

経営紹介

23 有限会社橋口水産／長崎県 橋口 直正

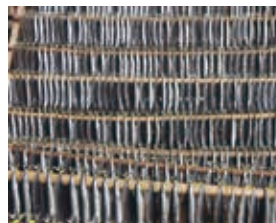
天然ブリをしのぐ高品質な養殖ブリの通年出荷に成功、安定生産のため海外に販路を見いだした。長崎・五島から世界へと挑戦を続ける経営者

変革は人にあり

27 有限会社月夜野きのこ園／群馬県 金子 崇範

キノコ菌床日本一を経営テーマに掲げ、日本のキノコの安定供給体制づくりに貢献。キノコ生産後の菌床で育てたクワガタがキノコの広告塔だと語る

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。



撮影：角田 展章

三重県熊野市
2008年冬撮影

寒サンマの丸干し

■冷たい潮風が吹く冬晴れの日、海岸では水揚げされたサンマが奇麗に並び吊るされ天日干しの真っ最中。熊野灘の辺りではサンマ漁の最盛期は冬で、三陸沖から南下してきたサンマは程よく脂が抜けており丸干し加工に適している。陽光を浴びるサンマ棚はなんともグラフィカル(絵画的)だ■

シリーズ・その他

観天望気

水産業改革の行方 山下 東子 2

農と食の邂逅

坂井 美幸／新潟県

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

風の強い日の旗として 夏井 いつき 22

主張・多論百出

一般社団法人日本さかな検定協会

尾山 雅一 25

耳よりな話 197回

超音波でガを追い払う 中野 亮 30

まちづくりむらづくり

外から来てもらえることで成り立つ

サービス提供型のわが農村へ

株式会社信州せいしゅん村／長野県上田市

小林 一郎 31

書評

西垣 通 著

『ビッグデータと人工知能 可能性と畏を見極める』

宇根 豊 34

インフォメーション

日本公庫農林水産事業本部長の新任のごあいさつ 35

農業経営アドバイザーの活動を推進 情報企画部 36

東京大学と酪農経営について共同研究 帯広支店 36

「アグリフードEXPO輝く経営大賞」受賞者決定 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第12回アグリフードEXPO大阪2019 38

10月号予告

特集は「どうなるeコマース、食品界の可能性は」を予定。

国内のeコマース(電子商取引)市場が急拡大している一方、食品のeコマース化率は他商品と比較して低く、農業者にとって物流や決済方法など、課題も多い。食品業界におけるeコマースは普及するのか、課題や今後の展望を考察する。

観天 望気

水産業改革の行方

いつかやらねばと誰もが思っていたが、いったん誰かが言い出せば議論百出し、収拾がつかなくなる。それが水産業改革だった。今年六月、水産庁は『水産政策の改革について』と題する五項目の改革プランを示し、目下この説明のために全国行脚を続けている。どうも本気で進めるようだ。資源管理、所得向上、就業構造は正など従来からの懸案事項に加えて、「水産業の成長産業化」が掲げられているところが新しい。

これまでも政府や民間のグループから改革案が出されてきた。自説を展開する研究者は筆者を含め多くいたし、東日本大震災のさなかに改革を説き出す人までいた。その都度、反対派の声が響き渡り、改革案はいつしか立ち消えた。ITやAIといった新興産業とは異なり、水産業のような伝統産業は慣習や既得権が生産システムの中につちり組み込まれている。そのため、一つ動かそうとするとドミノ式で方々に影響が及ぶ。それが自分にとって負に作用するのを恐れるあまり、誰もが変化を遠ざけてきた。しかしそろそろ、いやとうとう潮時が来たのだろう。

今回事されたプランは、これまでしつかりとやってきた既存のステークホルダーには大きな変更を強いることなく、不要な規制を廃止し、事業者と労働力の新規参入を促す内容となっている。反対の声・不安の声は上がっているし、今後、マイナーな変更はあり得るだろうが、改革の基本路線は維持されるものと予想される。

天然資源を相手にする水産業の場合、生産量を自在に増やせない。養殖も適地が限られているため同様である。この制約の中で成長産業化するには、生産性と付加価値の向上という内生的な成長を目指す他ないだろう。より少ない人数で、より品質の高い生産物を作り出せれば、生産「量」が変わらなくても生産「額」は上がり、ステークホルダーへの分配が増える。内生的成長のカギは技術革新であり、それをもたらす人材である。日本の技術力を水産業に注ぎ込む時代がついにやってきたのだが、成功の暁には選ばれし匠が高度な機器を操るのか、老若男女誰でもコレさえ使えばうまくいく道具が出回るのかは、まだ分からない。



大東文化大学経済学部 教授
水産政策審議会企画部会長

山下 東子

やました はるこ

1957年大阪府生まれ。80年同志社大学卒業。84年シカゴ大学修士(経済学)、2006年広島大学博士(学術)。13年から現職。主な編・著書に『魚の経済学(第2版)』(2012年、日本評論社)、『漁業者高齢化と十年後の漁村』(2015年、北斗書房)、『経済セミナー誌』(日本評論社)に「目指せ! 漁業の成長産業化」を連載中。

フエルミエのチーズとして
農家製の手作りが、評判!!
牛を大切に作る思いで
続けてきた牧場が
知ってもらえ嬉しい

農と食
の邂逅

坂井 美幸 さん

新潟県新潟市

LOYALHILLHOLSTEINS

人間が動物たちからお裾分けをしてもらった乳。その加工品がチーズであり、神様の贈り物といわれる。この四半世紀の間に、チーズ消費量が倍以上に増加し、国産チーズも増産傾向にある。日本の食文化として期待が高まる。





P19:搾乳には神経を使い念入りに乳頭清拭を行う。緊張の作業を終えてほっとひと息

P20:牛の観察は念入りに。「耳がたれていたり目がくぼむなど調子が悪い牛はすぐ分かります」(右) 牛が驚かないよう、必ず名前を呼んでからさわるようにしている(左上) 加工所で製造するチーズやヨーグルト(左下右) 響介君(9歳)、夏輝君(7歳)、悠晴君(5歳)の三兄弟とともに。「家で男の子、牛舎では女の子の面倒を見ています」と美幸さん(左下左)

動物を愛し、酪農の世界へ

牛舎を心地よい風が吹き抜ける。約四〇頭いる乳牛はさぞかし気持ちがいいだろう。臭いもほとんどない。「臭いが少ないのは、水分を含む風のおかげかもしれません」と坂井美幸さん(三七歳)は言う。すぐそばには阿賀野川が流れ、水分を含み重量のある風が臭気を抑えてくれるようだ。ここに、美幸さんが夫の武史さん(四一歳)、義父の武雄さん(六九歳)と営むLOYALHIL HOLSTEINSがある。

稲作兼業農家に生まれた美幸さんは根っからの動物好き。「呼べば応えてくれるし、一頭ずつ性格が違うところもかわいい」。幼い頃、祖母を伴い隣町にある牧場の牛をしょっちゅう見に行き、テレビで見た「ムツゴロウ動物王国」で働くことを夢見た。動物に関わる仕事を見つめるため、農業高校に入学。夏休みに北海道の牧場で一週間ファームステイをした。その頃から、牛への興味が高まり、帯広畜産大学別科(草地畜産専修)に進んだ。卒業後、両親の希望もあり新潟に戻った美幸さんは、酪農ヘルパーとして働き始めた。新潟県内の方々のヘルパー組合に「スタッフを募集していませんか」と電話をかけた。採用された中蒲原酪農ヘルパー利用組合から派遣された牧場の一つが、後にLOYALHIL HOLSTEINSとなる坂井牧場だった。武史さんは当時、飲食業の仕事をしていましたが、牧場を継ぐつもりで農業大学校に

進み、北海道で研修を受けるなど、美幸さん同様、牛一筋の人生を歩もうとしていた。

二人は周りから当然のように「一緒に頑張って牧場やつたら?」とはやされた。そんな言葉に二人は反発した。「若かった。周りの言葉を素直に受け止められなかった」(武史さん)。それでも、牛を大切に想う二人の心は深いところで通じ合っていた。実はそれを見抜いていた人がいた。近くで酪農を営む先輩農家だ。タイミングを見計らって二人を食事に誘ってくれた。そこから交際が始まり、武史さん三三歳、美幸さん二七歳でゴールインした。

未来ある酪農を追求して

牛舎の奥には、約二〇台の扇風機が取り付けられている。これらが外気を牛舎内に吸い込み、心地よい風を起こしている。トンネル換気というそうだ。牛舎内は常に清潔を保ち、牛たちがストレスなく過ごせるようにしている。祖父の代からのこうした酪農スタイルを基本としながら、二人は結婚後、「未来ある酪農とは」について考え、話し合ってきた。「両親からのやり方を受け継ぐだけでいいのかという不安があった」と武史さん。「子どもたちに、忙しいながらも楽しく仕事をする姿を見せたい」美幸さんという想いもあった。二人には元気な三人の息子がいる。

二〇一四年、両親から経営委譲されたのを機に牧場経営を見直した。一つは自動給餌機の導入を中心とした給餌方法の見直しだ。それまでは単味飼料を混合し給餌してきたが、

一種類でも好みに合わない飼料があると、食いつきが悪く、乳量にも影響を及ぼす。そこで牛が気付かないほど完璧に攪拌する混合機と、牛の体調に合わせて自動給餌するシステムを入れた。その結果、一頭当たりの乳量が一日二八キログラムから三四キログラムに増えるなど生産性が向上した。



自動給餌機が牛の前に餌を置いていく(上) ロイヤルヒルホルスタインズは「屋号の“忠”(LOYAL)と、名字の“坂”(HILL)から付けました」と武史さん(下)

もう一つはチーズの加工・販売だ。乳製品の加工は結婚当初から美幸さんが温めてきた構想だ。「搾った牛乳がどこに行き、どんな人が飲んでいいのか分からないもどかしさがあった」。想いが募った美幸さんは、ウェブで作り方を調べ、自宅の台所でチーズを作り始めた。チーズを選んだ理由は、ジェラート

を製造販売する酪農家はすでにいたこと、知り合いのレストランのシェフから「牧場の牛乳を使ったチーズはない？」と言われたからだ。「初めて作ったチーズがうまくできて、楽しいと思ったんです」。そして幸運が訪れた。折しも六次産業化に取り組む農家が利用できる食品加工支援センターを併設する施設「アグリパーク」が新潟市に誕生。販売許可を持つ施設だったため、同施設で製造したチーズを販売できることになった。さらに、近くのJAが農産物直売所を開設するタイミングとも重なった。美幸さんは、搾りたての生乳の味わいが醍醐味の「モツツアレラチーズ」と、割きながら食べられる「さけるロングチーズ」の販売を二五年六月から開始した。

地域に知ってもらえる喜び

こう書くと、いとも簡単にチーズが作れると誤解されかねないが、決してそうではない。もともと料理好きなことに加え、美幸さんのためまぬ努力があつてこそだ。牧場の仕事、家事や育児を終えてからの試作品作りはいつも夜中。「僕が先に寝て、朝起きるとまだ台所で作っていました」と武史さん。「最後までやらないと気が済まないタイプ。牛乳を混ぜる速さやpH調整など微妙な加減が必要ですが、やればやるだけの結果が出る」と美幸さん。寝る間を惜しんでの努力は実り、腕前はぐんぐん上達。直売所での売れ行きに手応えを感じ、二〇一六年九月、牧場横に加工施設を整備した。

「フェルミエ(農家製の、手作りのという意味のフランス語)のチーズは珍しい」とあちこちで評判になった。イベント出展への声が掛かり、それがきっかけでデパート、レストランへと販路が広がっていった。商品アイテムも増えた。一七年の牧場の売上高約五七〇〇万円のうち、チーズが一割弱を占めるまでになった。ただ、売り上げ以上に「レストランやデパートなど新たなご縁が広がったこと、チーズがきっかけで、地域の人に牧場の存在を知ってもらえたことが何よりうれしい」と美幸さんは話す。

牧場がある場所は亀田郷と呼ばれ、土地改良により低湿地帯を良質な水田にした場所だ。周りは一面水田が広がっている。米のイメージが強く、近くに住んでいる人からも「ここに牧場があつたの？」と言われることがある。「酪農は地域の理解があつてこそ続けられる。近所の人に認知してもらえるのが本当にうれしい」と美幸さん。

チーズ作りは週三日ほど。ひとたび始めれば八時間は工房に入り浸りになる。「まさに分刻みの生活。一日が三〇時間ぐらいあれば」と笑いながらも「まったく苦じゃないです。搾乳や掃除の作業も、食事をしたり風呂に入るように習慣になっています」と言う。たまの休みも武史さんと仲間の牧場を訪問し、情報交換に充てる。二人のような酪農家がいるからこそ、私たちはおいしい牛乳や乳製品を毎日口にできるとつくづく感じた。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

今年二月、北陸の豪雪のニュースが連日流れている頃、某テレビ局からいきなり問い合わせが入った。「俳句集団いつき組所属で、福井で農業をやっている、この豪雪でハウスが次々に倒壊している人の連絡先を教えてください」

あ！テツコの農場だ！と分かった。フェイスブックに「ハウスが倒れていく」という悲痛なコメントが上がっていた。どういう経緯でテレビ局が、テツコを探しているのかは分からなかったが、テツコに連絡を取り、テレビ局とつないだ。

テツコとは俳号だ。ラジオ番組「夏井いつきの一句一遊」に投句してくるリスナー俳人だ。俳句だけでつながる仲間だが、テツコの句には農業を詠んだ句が多く、添えられたコメントには「うちの農場」という言葉も出てくるので、農場で働くオバちゃんだと思っていた。

ところが、某俳句大会にて初めて生身のテツコに出会って驚いた。テツコは、シュツとした男前のオジサンだった。雇われているのではなく農園を経営しているという。カンボジアからの研修生を受け入れ、指導員を彼の国に派遣もしていると語るナイスガイ。未来の農業を語る彼の精神の清々しさにも感銘を受けた。

豪雪は続いている。その後もブログやフェイスブックで「目の前でハウスが潰れていく」「残るハウスを守るための雪掻きに全員が消耗している」「心が折れそうだ」という書き込みが続いた。

その惨状に心痛める組員という名の句友たちから募金と励ましのメールが寄せられたという。私もささやかなカンパと応援の一句を贈った。

雪晴の野にはためける旗となれ
いつき

四月、福井での仕事の合間にテツコの農園を訪問した。飴のようにねじ曲がったハウスの残骸が幾つも残ったままだった。残酷な光景だった。が、若いスタッフたちは澁^{はつらつ}刺たる笑顔で働いていた。精神の明るさは力だ。次に向かつて立ち上がる力が農業を支える。今は、向かい風の真っ只中にいる彼らだが、風の強い日の旗は美しい。テツコとその仲間たちも野に立つ美しい旗だ。

F



俳句集団いつき組組長
夏井 いつき

なつゐ いつき
1957年生まれ。愛媛県松山市在住。俳句集団「いつき組」組長、藍生俳句会会員。第8回俳壇賞受賞。俳句甲子園創設に携わる。松山市「俳句ポスト365」など選者。初代俳都松山大使。最新刊「夏井いつきの「時鳥」の歳時記」(世界文化社)など著書多数。

風の強い日の旗として

一般社団法人日本さかな検定協会

尾山雅一



●おやまさかず●
一九五六年山口県生まれ。日本さかな検定協会代表理事・株式会社協同宣伝取締役。早稲田大学日文科卒業。八〇年協同宣伝入社、営業職として民間・外資顧客一〇〇社余りのマーケティングコミュニケーションのほか、農林水産省の米食普及、中山間地域活性化事業を担当。二〇〇九年に日本さかな検定協会を社内起業し、以後代表理事を兼任。出題解説や副読本のコンテンツ取材に魚介のおいしい物語を求めて、各地の居酒屋や漁港を週末行脚をしている。

「魚

離れ」や少数特定魚種への好みの偏りの原因はどこにあるのでしょうか？

魚ほど産地情報やうんちくが価値を生む食材は他にないにもかかわらず、語り始めれば尽きない「生産の物語」という高付加価値情報が消費者に届かなくなっているところにもその一因があるのではないだろうか。

この四半世紀の間に街の魚屋さんが七割近くも姿を消したことにより、魚の種類・産地・季節・調理などの良き伝道師の多くを私たちは失いました。また、地方にも及ぶ核家族化や単身世帯の増加により、祖父母に教えられてきた季節の節目に登場する行事食の魚や郷土の味が伝わらなくなっています。

このような考えから、私たちは、魚にまつわる物語を伝達する手段として「日本さかな検定」(愛称「ととけん」)を立ち上げました。

魚・水産の素人である私どもの立ち位置は、あくまでも消費者視点にあります。消費者は知らない魚には

近寄ろうとしません。

健康訴求は気にはなっても、他に選択肢がたくさんある現在、これだけでは動きません。日本人は魚を食べる「べき」論には何も引つ掛かりを覚えません。売り手の常套句「安いよ、うまいよ」だけでは響かないのです。

モノとしての魚に安さを求める消費者は、おいしい体験(コト消費)になると数倍のコストも惜しまない傾向があります。おいしさを舌で、その理由を頭で消費するときには、モノ消費とは全く別の価値基準が働くからです。

だからこそ「価値」を伝えていかなければならないのです。おいしさの理由などの魅力を伝えること、つまり物語が大事になってくるのです。どこで誰がどのようにに獲り、おいしく食べてもらうために血抜き、神経締め、冷やし込みなどの手間をかけているか、という情報。さらに産地の気候・風土や地元ならではの食べ方など郷土の味、歴史・地勢背景などのエピソードで

もあると、申し分ありません。

幸

いなことに、全国津々浦々で四季折々に水揚げされる魚介・貝・海藻は五〇〇種類もいて、同じ魚でも産地が変われば季節も味も名前さえも異なります。落しどころは、それ故に付加価値が付いた魚はこの値段が相当だということ。物語性がある魚は売れるし、売りやすい。物語付きの魚はやがて料理になって家族やお客の前に出た折、その物語が語られ共有されるからです。あるいは、メニューを勧める折にも役に立ちます。

ただ「安いよ、うまいよ」と言うよりも、裏打ち、付加価値情報がある方が、はるかに食指が動きます。つまり、なじみのない魚でもおいしさの理由が人を動かすし、物語の豊かな魚にはそれ相当の対価を払う、というわけです。

ところで現在、漁業の在り方が大きく変わろうとしています。漁獲量を競う時代から未利用魚を含む少量多品種、さらに獲った一尾の魚をいかに高く売るかに移行しつつあります。生産が続けられる価格を維持するには「価値」を伝えること。今だけ、ここだけ、それだけの希少価値を消費者に実感してもらえる産地独自の物語が今こそ必要なのです。

そして、このような魚の物語を広めてくれる在野の語り部を私たちは「ととけん」で多く育てていきたいのです。

「ととけん」は二〇一〇年に東京・大阪で初めて開催、四七都道府県から魚好きを自認する老若男女二二〇〇人の方々が挑戦されました。その後、新顔の特産魚介の情報発信や、食の街、魚の街を目指す地域振興などを目的に地方開催の要望が寄せられるようになり、北は札幌、函館、八戸から南は沖縄糸満、鹿児島まで、二五の市町で開催してきました。

今年六月に九回目の開催となりましたが、この間に小学生から八〇歳代まで世代を超えた累計二万四〇〇〇人もの受検者を輩出しています。

これらの「ととけん」語り部たちが思わず誰かに伝えたいくなる魚介情報などを広く、多くの人に伝えるという活動が、近年低迷が続く日本の魚食の魅力再発見と、地域に根差す豊かな魚食文化の継承につながると願っています。

日本漁業の復興に向け、草の根運動の形で「ととけん」の取り組みを続けてまいります。



魚離れの二因は物語の伝道師を失ったことだ 「ととけん」通じ在野に語り部創出を目指す

超音波でガを追いかつ

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
果樹茶業研究部門 生産・流通研究領域 虫害ユニット 主任研究員

中野 亮

「飛

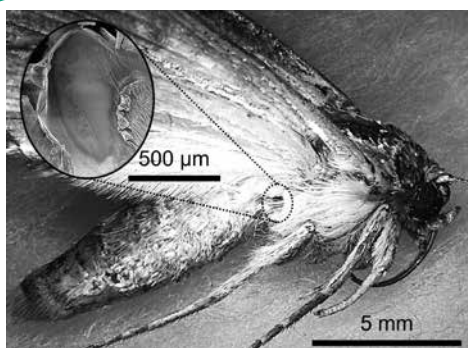
んで火に入る夏の虫」ということわざがあるように、夜の街灯に虫が群がっているのを誰しも見たことがあるかと思います。このような夜行性の虫を、コウモリが大量に食べていることをご存じでしょうか。

虫を食べるコウモリの多くは、ヒトには聞こえない超音波（周波数二〇キヘルツ以上の高い音）を発し、跳ね返るエコーを頼りに、飛んでいる虫の位置を高精度に把握しています。

実は、これらのコウモリが
一晩に食べる虫の量は、自分の体重と同程度に達します。ガをよく食べるユビナガコウモリ（重さ二二グラム）やキタガシラコウモリ（重さ二四グラム）が体重〇・一グラムのガを捕まえるとすると、一匹のコウモリは一晩で一〇〇〜二〇〇匹以上のガを食べている計算になります。

コウモリがガを食べること
とで、主にガの幼虫による作物被害の軽減が期待され、農業大国アメリカではガ類害虫を食べるコウモリがもたらす経済効果が試算されています。農地面積の比率を基に日本に当てはめると、コウモリがいなくなつた場合、年間約四五億円の損失となります。

さて、私たちはガ類害虫による被害の抑制のため、合成超音波を利用する技術の開発を進めています。実は、微小なものを除くガの八五％の種が、コウモリの接近を感じとるために鼓膜器



ハスモンヨトウの成虫と鼓膜

官からなる耳を持ち、超音波が聞こえると遠くへ逃げるなどの行動を示しているのです。この習性を利用し、ガが作物などに卵を産みに飛んでくるのを合成超音波で防ごうというわけです。

そ

こで私たちは、日本の代表的なガ類害虫であるハスモンヨトウ（図）、オオタバコガ、ヨトウガなどのヤガ類を対象に、多様な形（パルスの長さなど）の合成超音波を流し、彼らが嫌がる超音波を特定しました。並行して、J

RCS株式会社および東北学院大学が中軸となり、音の大きい超音波をさまざまな方向に出力できる装置の新規開発を行いました。この装置を作物のほ場に設置し、野生のガの飛来が抑制可能を試験しました。

検証は、ガの侵入経路が限定されるイチゴのビニールハウスで行いました。計一五ヘクタールの栽培施設で、ハスモンヨトウを対象に開発したスピーカーを四台設置したところ、施設内に産み付けられた卵の数は、装置の設置前と比べて九〇％以上の減少となりました。

この他、オオタバコガやヨトウガなどでも効果を検証中です。また、食品加工工場などに多い貯穀害虫のノシメダラメイガなども試験予定です。作物に虫が付く前に虫自体を寄せ付けない技術が確立されれば、虫被害の軽減に大きく寄与できると確信しています。

F



Profile

なかの りょう
1980年神奈川県生まれ。2008年東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。09年理化学研究所、10年農研機構果樹研究所入所、14年学振海外特別研究員（トロント大学）、現在に至る。専門はガ類害虫の防除技術と生物音響学。



外から来てもらえることで成り立つ サービス提供型のわが農村へ

長野県上田市

株式会社 信州せいしゅん村代表取締役

小林 一郎



「のうの会」活動が原点

地域の可能性、力を信じて、「前例にないことを、独創的に」をモットーに、私たち「信州せいしゅん村」は地域おこしに取り組んでいます。

農業は栽培した野菜やお米を他所に売って生計を立てるのが一般的です。しかし、ここ上田市武石地区のように「中山間地農業」といわれる条件不利地では、いわゆるブランド化に結びつく農産物生産はなかなか厳しいのです。かといって、市場にただ出荷するだけでは箱代にもならないときもあります。生産者の高齢化もあり、武石地区は少子・過疎化に悩み、耕作放棄地が広がるばかりでした。

私が初めて農村農業の交流組織を立ち上げたのは一九九八年。今から二〇年前になります。九〇年代といえば牛肉やオレングジ、そして米などの輸入が相次いで自由化され、中国からの農産物輸入も増大し始めました。また、バブル経済がはじ

けて日本が低迷していた時期でもあり、私はこの先の農業や農村がどうなっていくのだろうかと心配し、友と本気で語り合ったものでした。こういった想いがある人を集めようと、友人、知人に呼び掛け、農村農業の情報交換会「のうの会」＝「農KNOWの会」を発足させたのです。

ある日、私が「のうの会」であと二〇年経ったら誰が畑に立っているかな？ あと一五年経ったら誰が田んぼに立っているかな？ あと二〇年経ったら隣に人が住んでいるのかな？」と切り出したら、一同シーンと静まり返りました。農業収入で家族を養えない。そんな業界に後継者がいないのは当然です。でも、このまま成り行きに任せるのかと続けて私が問うと、みんな「ノー」と答えてくれたのです。私は嬉しかったですね。ここから私たちの会は、情報交換から地域活性化活動へと歩を進めることになり、二〇〇〇年に任意団体として信州せいしゅん村を立ち上げたのです。

私たちには投資できる余剰資金はありません。あるのは田んぼや畑・自然環境など、そして自分たちの頭と体だけです。そこで、議論を重ねた末、モノやカネではない農村の「心の豊かさ」を売りにした「外から来てもらえることで成り立つサービス提供型の農村」を目指すことを決めました。

「非日常」ではない、農村生活体験

信州せいしゅん村では、自ら育て、採り、調理してこだわりを食すオーナー制度「我家我家ファーム」、野菜の見本園で元気な高齢者と都市からの親子が交流するGファーム（Gは、じいちゃんやゴールド世代のG）などさまざまな独創的取り組みを展開していますが、今回は二〇二〇年から始めた、日帰り農村生活文化体験「ほっとステイ」をご紹介します。

これは、受け入れ農家に九〜一六時まで日帰りで滞在、住民のおじいちゃんやおばあちゃんと一緒に農作業など行い、農村生活に触れてもらうお

profile

小林 一郎 こばやし いちろう

1951年長野県生まれ。69年長野県立丸子実業高校卒業後、地元の工務店、建設会社に勤務。82年に独立し、89年豊友建設株式会社（のちに株式会社豊友に社名変更）を設立、代表取締役役に就任。98年に信州せいしゅん村の前身となる「のうの会の会」を立ち上げる。2009年、株式会社信州せいしゅん村を設立、代表取締役役に就任。信念と覚悟を持って地域活性化に取り組んでいる。

株式会社信州せいしゅん村

2000年立ち上げ、09年法人化。投資資金が無いことから箱モノをつくって活性化事業に取り組むのではなく、地域資源を活用でき、参加者も負担が掛からない事業を模索し、「ほっとステイ」はじめ、数々の独創的事業を展開する。また、活動資金は事業収入で賄っている。13年『日本農業賞 夢の架け橋賞』、18年「オーライ！ ニッポン大賞 内閣総理大臣賞」など多数受賞。

というものです。

その日その日のありのままの日常生活を一緒に過ごしてもらおうので、入村式は行わず、体験者には直接受け入れ農家に来てもらいます。

体験する農村生活は、受け入れ農家に任せています。また、雨の日は、家の中でワラをなったりおはぎを作ったりします。しかし、どの体験を通じて、大事な風俗・文化・しつけに必ず接することができる、という心はぶれないようにしています。

体験者には昼食を持参してもらいます。これによって、飲食店の営業許可取得などは不要になります。そして体験者はお茶や味噌汁、漬け物を一緒にづくり、食卓を準備し、片付けまでするので。これが、日々の当たり前の農家の生活です。その中に体験者を迎え入れ、一緒に過ごすのが「ほ

っとステイ」なんです。

グリーンツーリズムといえば、まず参加者が集まり入村式を行う。そして時間を区切って稲刈り体験、地域伝統料理などの「非日常」体験をこなしていく、というものが多くではないでしょうか。

しかしこのようなツアー内容を組むには、準備や段取りに時間もお金もかかるうえ、そこに実際の農家の姿があるかという点、そうではない場合もある。例えば、長雨がなければ、ジャガイモは腐り収穫量は落ちるでしょう。私たちはその様な場合に備え、ジャガイモ収穫の収穫量を保証するのではなく、採れないという自然を体験してもらいたいのです。

このように「ほっとステイ」では、体験者に本物の「田舎の農家」の暮らしを感じてもらえ、受け入

世界20カ国からの来訪者

れ農家も取り立てて事前準備をする必要がない点で、体験者にも住民にもメリットがあるのです。

当初、「ほっとステイ」のような「農村体験」は、ウェブ検索しても全くヒットしない状況で、教育旅行業者に営業しても、「そんな内容では旅行商品になりません」と、相手にされませんでした。

ところが、ありがたいことに「ほっとステイ」を体験してくれた人がリピーターになってくれ、口コミが広がり、大手旅行会社も興味を持ってくれるようになり、現在では修学旅行生など団体から個人まで、子どもも大人も来訪してくれるようになりました。

また最近では、国内だけでなく、海外からも来



上：農村の日常を体験する都会の子どもたち

下：カナダ人は初めての百人一首（坊主めくり）や手遊びに大興奮

訪者があり、延べ二〇カ国から受け入れていています。インバウンドで配慮することも特になく、問題も起こっていません。むしろ、外国人の方が、より農村生活に感動してくれると喜んでいる受け入れ農家もいるほどです。受け入れ農家は、日本人来訪者となんら変わりなく対応し、日本語の武石地区のお国言葉で話しかけます。でも、ハートは万国共通なのでしよう。不思議と通じるのです。

さて、「ほっとステイ」は、さまざまな効果を地域にもたらしました。まずは、経済効果ですが、来訪者からは一回当たり約三〇〇〇円を頂戴しています。年間約二万人ほどを受け入れているため、「ほっとステイ」だけで六〇〇〇万円に上ります。

一番大きな効果は地域住民の生きがいとなり、自分たちや地域の自信につながったことです。ありのままの生活の中に受け入れた来訪者が、「いい所ですね」「ここに住みたいな」って褒めてくれるのです。地域の誇りにつながり、さらに、「来てくれる人にもっと喜んでもらおう」と幹線道路沿いの耕作放棄地を再び耕す人もでてくるなど、自主的な地域活動も見られるようになっていきます。

こんなこともありました。受け入れ農家のおじいちゃんがあるとき、「おらー、死ねなくなっちゃった」と言うんですね。「おかしいことを言うな」と理由を聞くと、中学生からもらったという色紙を差し出して、「これを見ておくれや」と。するとそこに、「おじいちゃん、死なないでね」と二カ所も大きく書いてあるのです。「ほっとステイ」体験を通して感じたこの言葉。だから、「死ねなくなっちゃった」んですね。人は歳をとればとるほど、人様の厄介になりたくないし、人様の役に立

ちたいという願望が強くなります。人様の役に立つことが生き甲斐に通じ、目がキラキラと輝くのです。さらには、「ほっとステイ」の波及効果として、部外者にオープンな地域というイメージが広がり、なんと地域にイターン移住してくれる若者が現れ始めました。

一方、課題もあります。受け入れ農家は八〇軒ありましたが減少し三五軒になり、平均年齢は約七三歳と高齢化が進んでいることです。活動地域を広げ受け入れ農家を募ることで対応しており、現在は受け入れ地域を近隣の七地区に拡大しています。

「経営は営業なり」を必死に実践

さて私は、三つの覚悟を持って地域活性化活動に取り組んでいます。それは「自腹を切る覚悟、一〇年やっても黒字にならない覚悟、何をにおいても駆けつける覚悟」です。

現在「農村体験」のヤフー検索ヒット数が四一五万件で、検索結果のトップには信州せいしゅん村の名前が出てきます。しかし、「ほっとステイ」を開始した当初は、まさしく「前例にないこと」だったんです。困難にぶち当たることも多くありました。当時、村や県や教育委員会に後援を依頼しても、担当者から「前例がない」と断られました。そこで私は「今日の車社会もコンピューター社会も、前例を破ったからあるのですよ。私たちは前例を破った恩恵を受けているんですよ。やりたくないから前例にありません、と言うのですか」と返し、そして「前例を破るのにどこが問題なのですか」と続け、課題解決を図り、乗り越えてきました。

対旅行者者では、受け入れ農家の代理となり、相手側の言いなりにならず、お互いが納得いくように話し合い、さまざまな取り決めをしてきました。「ほっとステイ」は物事の決断と結果責任を果たすことの大切さを教えられた事業です。

また「経営は営業なり」を実践してきました。営業チャンスがあると見たら、朝イチの新幹線に乗り込み、本来の自分の業務の前に営業に歩き、「人は触れ合って成長する」「積極性を身に付ける体験」と訴えて、「ほっとステイ」を誘致。業務が済んだ後もまた営業周りをを行い、最終の新幹線で帰宅したものです。そこで、活性化の取り組みは、いわゆる行政手法型の羊を一〇〇匹集める事業ではなく、同じ志のトラやライオンが二、三頭集まった時点で始めることが大事だと私は考えます。なぜなら、組織は作って終わりではなく、作ったところが本来のスタート地点だからです。

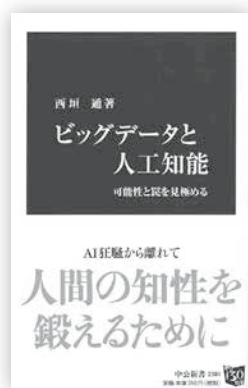
それにつけても、常々残念に思っていることがあります。行政の支援事業や交付金事業では、事業費の中にぜひ申請者の人件費を考慮してくれないのでしょうか。補助金事業の企画立案者には給与が出ているのに、同じ仕事をしている申請者には出ない。活性化事業に取り組む人は、やればやるほど持ち出し。自腹を切ってもらうことを前提とした支援事業だ、としか思えないのです。

私は、今後も課題に直面するでしょう。でも、覚悟を決め本気でやれば、いずれは多くの人が支援してくれ道は開けることを身を持って体験してきました。今後も、名誉職として長を引き受けられたいということではなく、信州せいしゅん村のライオンとして事業を取り進めていきます。

『ビッグデータと人工知能』

可能性と畏を見極める

西垣 通著



(中央公論新・780円 税抜)

先端技術にこそ「経験の知」を

宇根 豊

(百姓・思想家)

スマート農業も機械任せではうまくいかない。なぜなら、人工知能に百姓の「経験の知」を組み込むことが成功していないからだ。ところが近年、いくつかの機関が二〇三〇年には「国内の労働の半分以上は人工知能で代替される」と予測している。農業も例外ではないが、人手不足が解消できると楽観視している場合ではない。

また近年「シンギュラリティ」という、人工知能が人間を凌駕して、コンピュータが世界を運営する時代になると予想する人たちもいる。これには賛否両論があつて激突している。

著者はコンピュータソフトの開発者を経て、東大教授になった人だ。その道の専門家であり、主張は具体的で明快である。「どんなに機械が進歩しても、人間にとって代わることはない」と力説する。ビッグデータやディープラーニングの基

礎理論から、その歴史も教えてくれる。その視野はじつに広く深く、哲学にまで及んでいる。入門書としてもよくできている。

最大の力点は、機械と生きものの違いである。私たちはそんなことはあたりまえだと思つていようだが、ICTやIoT、AIの研究者の間では、「人間の脳も物質でできており、刺激の伝達は電気なのに意識や心を生み出す。同じ原理で、コンピュータから意識が生まれない理由はない」と信じ込んでいる人が多いそうだ。

著者は「自然科学のたこつぽにはまるな」とくり返し警告している。機械は自律しているようでそうではない。プログラミングされた専門領域では、人間に優る仕事をするが、予想外のことは手に負えない。まして百姓の経験の知は、相手の作物、家畜、草や虫などを、生きものとして見て、感じて、情愛を注ぎつつ判断する。これは一人一人異なるし、経験の蓄積が常に呼び戻されて、更新されていく。つまり百姓自身も生きものなのである。一方の機械は、他律的で、予想外のことに反応できない。

たしかに人工知能は人間の肩代わりにはならない。だからこそ使いこなすためには、人間の方にもっと深くて広い知見と思想が必要だと、著者は具体例を挙げながら、説いて聞かせてくれている。おかげで人工知能への気持ちが定まった。スマート農業も機械にできないところを百姓が「経験の知」で補うしかないのだ。この分野こそ、新しい世界ではないだろうか。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2018年7月1日～7月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 森林・林業白書 平成30年版	林野庁／編	全国林業改良普及協会	2,200円
2 水産白書 平成30年版	水産庁／編	農林統計協会	2,400円
3 本当はダメなアメリカ農業	菅 正治／著	新潮社	740円
4 水産小六法 平成30年度改訂版	水産法令研究会／監修	水産社	15,000円
5 週刊ダイヤモンド JAを襲う減反ショック 儲かる農業2018 (2018年2月24日号)	週刊ダイヤモンド／編	ダイヤモンド社	685円
6 新版 農業がわかると、社会のしくみが見えてくる 高校生からの食と農の経済学入門	生源寺 眞一／著	家の光協会	1,200円
7 食料農業の法と制度	井上 龍子／著	金融財政事情研究会	2,200円
8 森づくりの原理・原則 自然法則に学ぶ合理的な森づくり	正木 隆／著	全国林業改良普及協会	2,300円
9 攻めの農林水産業のための知財戦略 食の日本ブランドの確立に向けて	農水知財基本テキスト編集委員会／編	経済産業調査会	4,900円
10 いま蘇る柳田國男の農政改革	山下一仁／著	新潮社	1,600円

日本公庫農林水産事業本部長の新任のごあいさつ

農林水産業と地方を未来の子どもたちに引き継ぎたい

六月二日の日本公庫定時株主総会において、役員の異動がありました。農林水産事業本部長については、高橋洋が退任し、新井毅が就任しましたので、読者の皆さまへごあいさつ申し上げます。

この度、日本政策金融公庫農林水産事業本部長を拝命した新井です。皆さまには、日ごろより日本公庫へのご理解とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。また、「平成30年7月豪雨」により被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

日本公庫は「国の政策の下、民間金融機関の補完を旨としつつ、社会のニーズに対応して、種々の手法により、政策金融を機動的に実施する」ことを基本理念としています。

セーフティネット機能を果たすことは、最も重要な任務です。今回の豪雨災害に際しても、直ちに被災地の各支店に相談窓口を設置したところであり、被災された皆さまからのご相談に、迅速、かつ、きめ細

かに対応してまいります。

さて、政府は「農林水産業・地域の活力創造プラン」を策定・改訂し、農林水産業の成長産業化に向けた政策を展開しています。わが国の農林水産業は、長年の間、右肩下がりの状況にあり、後継者も十分に確保できず、このままでは、異次元の超

には、コストの削減と販路拡大・付加価値向上による収入の増加に向け、規模の拡大や施設整備の高度化、六次産業化など新事業の展開、輸出などを進めることが必要であり、そこに資金ニーズが生じます。また、新陳代謝の促進のためには、リスクを取って新規に就農される



新井 毅

代表取締役専務取締役
(農林水産事業本部長)

高齢社会となる二〇二五年頃には、持続可能な産業と言えなくなる事態になることが強く懸念されます。

農林水産業を若者が入ってきたくなる産業にすることが喫緊の課題であり、そのためには、生産性の向上と新陳代謝の促進を図ることが不可欠です。生産性の向上のため

方への経営サポートが必要です。

日本公庫は、全国の店舗網を活かし、農林水産業の現場の動きを捉えながら、さまざまな制度資金の融資や出資により、これらの資金ニーズに適切に対応して金融支援をするとともに、農業・林業・水産業の各経営アドバイザーによるコ

ンサルディングや、国産農産物・加工食品の展示商談会「アグリフードEXPO」による販路開拓の支援、「トライアル輸出支援事業」による海外展開のサポートなどのきめ細かな経営支援サービスを提供してまいります。現場の声にしっかりと耳を傾け、地域の金融機関や道府県など関係機関と密接に連携を図り、農林漁業者や食品企業の皆さまの成長・発展に向けた支援を行ってまいります。

また、今年一〇月、日本公庫は統合一〇周年を迎えます。これを機に、国民生活事業、農林水産事業、中小企業事業の連携・融合をより強化し地方創生への貢献に取り組みむとともに、一〇年間の歩みを振り返り、お客さまサービスの一層の充実に努めてまいります。

●経歴

一九八五年四月 農林水産省入省
二〇一四年七月 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局次長
と創生本部事務局次長
一六年七月 農村振興局農村政策部長
一七年七月 近畿農政局長
一八年六月 現職



「アドバイザーの発展に期待」と大澤誠経営局長

総会
農業経営アドバイザーの活動を推進

「農業経営アドバイザー活動推進協議会」の今年度総会を開催。本協議会は農業者の経営改善を支援する農業経営アドバイザーの活動を促進するための組織で、日本公庫が事務局を務めます。総会では各都道府県に設置する「農業経営アドバイザー連絡協議会」の昨年度取り組みを紹介、さらに千葉銀行、八十二銀行の農業経営アドバイザーが活動を発表しました。

参加者からは「地方に連絡協議会が立ち上がり、情報共有が容易になった」との意見がありました。六月一五日、於：千代田区、参加者：参加団体など三〇人（情報企画部）

連携
東京大学と酪農経営について共同研究

帯広支店農林水産事業は、今年度より東京大学大学院農学生命科学研究科（中嶋康博教授研究室）と、より良い酪農経営の在り方を提案することを目的として、「北海道東部における酪農の生産性向上に関する共同研究」を開始しています。

本研究では、わが国の酪農地帯の中でも、大規模経営や最新鋭の農業機械の導入が進んでいる十勝・上士幌町と根室・別海町の酪農家などを対象として、飼養作業全般の効率化、TMRセンサーを活用した省力化、牧草飼料の品質が農業経営に与える影響などについて、現地調査および検証・分析を行います。

帯広支店は東京大学に対し、現地の酪農情勢の解説やこれまで多くの酪農経営先への融資から得られた知見の提供、現地調査の実施協力などをしていきます。

本共同研究が、多くの課題を抱える日本の酪農経営の課題解決や経営発展につながる知見となるよう、来年三月をめどに取りまとめる予定です。
（帯広支店）

「アグリフードEXPO輝く経営大賞」受賞者決定

「アグリフードEXPO輝く経営大賞」は地域の農業・食品産業の担い手としてふさわしく、「アグリフードEXPO」への出展をきっかけに、優れた経営を実現している経営体を表彰することにより、多くの経営体の目標となる姿を示し、もって地域の農業および食品産業の育成に寄

与することを目的としています。

本賞は、日本公庫農林水産事業（旧農林漁業金融公庫）が2005年度に創設しました。全国各支店から候補者の推薦を受け、社外の有識者で構成する選定委員会における審議の結果、今年度の受賞者を決定しました。

■「大賞」受賞者（五十音順）

社名	所在地	業種・規模
株式会社 谷口農場 （代表取締役 谷口 威裕）	北海道 旭川市	稲作42ha、野菜11ha（トマト、トウモロコシなど）、加工品
有限会社 ひるがのラファノス （代表取締役 奥村 照彦）	岐阜県 郡上市	野菜30ha（ダイコン、ニンジンなど）、加工品

■選定基準

優れた経営能力、技術力、実績を有するとともに、アグリフードEXPO（東京・大阪）への出展をきっかけに、売り上げ増加、販路拡大、消費者ニーズの把握、商品開発などを実現した経営。

■選定委員（敬称略）

大泉 一貫（会長）／宮城大学名誉教授 青山 浩子／農業ジャーナリスト 梅本 雅／農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター所長 荏林 幹太郎／学習院女子大学国際文化交流学部教授 藤田 毅／有限会社フジタファーム代表取締役 松田 恭子／株式会社結アソシエイト代表取締役 森 剛一／アグリビジネス・ソリューションズ株式会社代表取締役・税理士

※「アグリフードEXPO輝く経営大賞」受賞者紹介および関連企画は本誌12月号と1月号で掲載予定です。

みんなの広場

◆四月号「平成生まれ!! 農林漁業へ」を拝読。後継者不足といわれる中、新しい視点で参画する若者の存在を知り、少し安堵したところ
です。

私も農業に参入して、はや一二年目になりました。日々の作業にも慣れ、自身の経営について考える余裕も出てきました。小農は小農なりに、「できること、気付くこと、苦楽を味わうこと」があると考えます。

新規に就農する際には「まずは自分の経営を越えて生業の理想とは何か」を考えてみる。ここが就農の出発点ではないでしょうか。

(山梨県 荏澤 靖)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒100-0004

東京都千代田区大手町一丁目九

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫

農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 〇三-三三-七〇一-三三三〇

「平成30年7月豪雨」に関する相談窓口

日本公庫農林水産事業では、本災害により被害を受けた皆さまからのご融資やご返済に関するご相談に、迅速、かつ、きめ細かな対応を行ってまいります。

お問い合わせ先	松江支店	TEL:0852-26-1133
本店	岡山支店	TEL:086-232-3611
札幌支店	広島支店	TEL:082-249-9152
帯広支店	山口支店	TEL:083-922-2140
北見支店	徳島支店	TEL:088-656-6880
岐阜支店	高松支店	TEL:087-851-2880
大津支店	松山支店	TEL:089-933-3371
京都支店	高知支店	TEL:088-825-1091
大阪支店	福岡支店	TEL:092-451-1780
神戸支店	佐賀支店	TEL:0952-27-4120
鳥取支店	鹿児島支店	TEL:099-805-0511

編集後記

④「海なし県」、中でも日本一海から遠い県庁所在地で生まれ育った自分にとって、新鮮な海の幸は今でも最高のごちそうです。日本人の魚離れが言われ久しくなりますが、漁業者サイドの成長産業化へ向けた改革と消費者サイドの意識改革の両輪で、日本の伝統的な食文化が次世代へ続くことを願っています。

(西山)

④「この人と1時間」近藤さんへの取材日に関東地方を台風が直撃。交通機関の乱れにより、取材開始が予定より三時間近くも遅くなっていました。取材の遅延にも快く対応してくださった近藤さんの笑顔とやさしさ、出していただいたコーヒートの温かさが、台風でぶぬれとなった身に染みわたりました。

(柴崎)

④多論百出、「ととけん」出題問題が面白い。「新しいグリの火加減がつかめない」という編集部メンバーの悩みから魚の焼き方について雑談が盛り上がった直後、「魚をおいしく焼く火加減の基本は？」という問いを発見。解答に一同なるほどとなり、早速その晩ブリを焼いた私は、家族に対してにわか語り部となりました。

(城間)

④特集の平石さんは、今後の漁船にはICT、IoTなどのスマート技術が必須と唱えています。これから先端技術との付き合い方については、書評の宇根さんが先般自身のサイトに掲載された最新コラムが示唆に富みます。鍵は、使い手の「知」。せっかくの技術、ただ頼るのではなく、経験に裏打ちされた知をもって使いたいですね。(前島)

AFCフォーラム Forum

編集

鳴谷 元 西山 大也 高雄 和彦
柴崎 勇太 城間 綾子 前島 幸子
鈴木 晃子

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ https://www.jfc.go.jp/

印刷 凸版印刷株式会社

販売

株式会社日本食糧新聞社
〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4
ヤブ原ビル
Tel. 03(3537)1311
Fax. 03(3537)1071
ホームページ
http://info.nissyoku.co.jp/koudoku/
お問い合わせフォーム
http://info.nissyoku.co.jp/modules/form_mail/

定価 514円(税込)

④ご意見、ご提案をお待ちしております。

④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとと田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり
農と食を
つなぎます。

第12回 アグリフードEXPO大阪 2019

プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月20日(水)/21日(木)

10:00~17:00

10:00~16:00

主催

日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



いっしょに漁業の成長化



『おいしいお米がたくさんとれたよ』松山 佳真 鹿児島県始良市立松原なぎさ小学校

■AFCフォーラム 平成30年9月1日発行(毎月1回1日発行)第66巻6号(817号)
 ■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
 ■販売/株式会社日本食糧新聞社 〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-14-4 47原ビル Tel.03(3537)1311 ■定価514円 本体価格476円



日本政策金融公庫 農林水産事業本部

<https://www.jfc.go.jp/>